

聖木曜日 4月14日 分かち合い

ヨハネ 13、1-15

イエスが亡くなる前に弟子たちとされた「最後の晩餐」の席でのことがヨハネ福音書から読まれた。共観福音書(マタイ・マルコ・ルカ)は、この最後の晩餐を、ユダヤ人が大事に守って来た過ぎ越しの食事ととらえ、そこでイエスがパンと、ぶどう酒の入った杯をとり、「これはわたしの体、わたしの血である。わたしの記念として行え」、と言われたことを記している。いわゆる、聖体制定の場面である。今読まれたヨハネ福音書では、イエスが食事の席から立ち上がって、手ぬぐいをまとい、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗われたことを中心に記している。従って、聖木曜日の典礼では、通常ミサの中で洗足式が行われるが、今年も、コロナの影響で割愛される。

弟子たちは、そのことの意味がわからなかった。旅で砂ぼこりを浴びてたどり着いた主人や客人の足を洗うのは奴隷のすること。ペトロは尋ねる、どうして、先生である方が、弟子の足を洗うのか。イエスは「今はわからないが、後で分かるようになる」と言われる。そして、最後に読まれたように、「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」と。わたしは模範を示したのだ、と。

「足を洗う」とはそもそも何を意味するのか。へりくだって、奴隷のするような汚い仕事を喜んですることか。それとも、人の心の汚れた部分を清める＝罪を赦す、ことか。むしろ、相手を自分より偉い存在と思って、相手に仕えること、奉仕することではないか。他の福音書も、「わたしが来たのは仕えられるためではなく、仕えるためである」というイエスの言葉を記している。復活後、復活の証人、宣教者となったパウロは書く、「へりくだって、互いに相手を自分より優れた者と考えなさい」(フィリッピ 2.3)と。イエスの生涯は、まさに、そのような、人々のために自分を差し出す、惜しみなく、相手に自分を与える生涯だった。そして、今、まさに苦しみと十字架の死をもって終わろうとする生涯の意味は、そのような、自分のすべて、命までも人に差し出すこと、つまり、愛そのものであったことを、イエスは教えようと言われたのではないか。そんなイエスの生き方に少しでもあやかり、自分を捨て、人に仕える生き方ができるよう、導きを祈ろう。

ヨハネ福音書は、最後の晩餐でイエスが弟子の足を洗われたことを記しながら、教会生活の中心とも言うべき聖体の制定について、全く触れないのはなぜか、と思う方もあるだろう。実は、ヨハネは、あの有名な、パンをふやして群衆に食べさせた出来事(6章)の後で、イエスがされた「命のパン」についての長い説教を記しているのだから、重複を避けたのかもしれない。しかし、それだけではない。

イエスが弟子の足を洗うことと、自らを人が生きるための糧であるパンとして与えることは無関係どころか、深いつながりがあることを理解しなければならない。イエスは、その説教の中で、「わたしは命のパンである。…わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉である」(6.48、51)とまで言われた。ご自分を、人々が生きるための糧として残されるということ、糧となって姿を消し、その人の中で体を養うものになるということ、それほどまでにへりくだって、自らを小さくするということは、これは、まさに、弟子の足を洗う、奴隷の身分になる、ということと一つのことではないだろうか。わたしたちがミサの中で当然のようにいただくパンが、イエスの、それほどへりくだりの業であること、イエスの受肉から十字架の死までのすべてが、そうした神のへりくだりの業であることを考え、感動を覚えない人がいるだろうか。

ミサの第三奉献文の中で、司祭はこう祈る、「主イエスは渡される夜、パンを取り、あなたに感謝をささげて祝福し、割って弟子に与えて仰せになりました。『皆、これを取ってたべなさい。これはあなたがたのために渡される、わたしの体である』」と。主イエスがこの世から去って行かれる前の晩にこう仰せになったこと、いわば、イエスの「遺言」であることを心に刻みたい。これから過ぎす聖なる3日間、主イエスの受難、死、そして復活が、そうしたイエスご自身の、人間に対する限りない愛であり、へりくだりの業であることを、より深く悟り、それを生きる恵みをともにお祈りしよう。(S.T.)